

## お茶の歴史を解き明かす 経済学部、期待のホープ！

「お茶は毎日、欠かさず飲みます。とくに講義の後や論文を書くときはこまめに飲みますね。お茶にはリフレッシュ効果があり、頭がスッキリするんですよ。ですから受験生のみなさんも、ぜひお茶を飲んで、入試を乗りきってください。茶西はお茶を養生の仙薬と言っています」。お茶をこよなく愛し続ける寺本先生。関西学院大学の研究環境は抜群。キミもこの大学で、人生を変えるようなとおきのテーマに出会うかもしれない。



### 発端は日本経済史の研究で 発見したお茶の意外な側面

高校生の頃、明治維新以降の歴史に興味を持っていた寺本先生は、関西学院大学で本格的に日本史を勉強しようと考えていた。しかし文学部ではなく、経済学部への進学を決める。「日本近代史を学ぶには、経済のメカニズムを理解しているほうがより深くアプローチできる、そう思ったからなんです」と。歴史は経済の好不況によって大きく左右される。まさに、歴史と経済は密接に関わっている。

ゼミに入って先生は貿易史の研究から「花形輸出商品としてのお茶」に出会う。「明治期、お茶は2万5千〜3万トンほど生産されていたのですが、そのうち約2万トンが主として米国へ輸出されていました。また金額で見ると、輸出総額の15%も占めていた時期があったのです。正直、この数値は意外でした」。こうした事実が断然、先生にお茶への興味をかき立て、お茶の研究に入っていく。

製茶輸出は明治末年から衰退しはじめ、輸出総額に占める割合は1〜2%にまで落ち込む。しかし1920年代の長期停滞期、全国的に農村が疲弊するなか、静岡や南九州の茶産地が逆境をバネに発展していく……。先生は断片的にしか知られていなかった茶業の史実を論文にまとめ、『戦前期日本茶業史研究』を出版する。

お茶への関心はその後一段と深まり、文化面、技術面、保健効果の面など、総合的観点からアプローチを試みていく。こうした中で、お茶の研究に携わっている多くの人たちと交流し、現在は宇治の茶業関係者と協力して、宇治茶業を活性化する取組にも参加。「今、ペットボトルのお茶はものすごく人気があるのですが、リーフ

(茶葉)は低迷しているんですね。宇治茶も厳しい環境におかれています。しかし宇治は、茶道文化と製茶技術の発展に最も貢献してきた産地。そんな由緒ある地をどうにかして盛り上げたいんです」。そのために茶業研究者として何ができるか、どんなアイデアが提案できるか、もっか鋭意考察中だ。

先生の研究対象はお茶だけにとどまらない。食生活の変遷という分野にも広がっていく。

「昔は食品の生産者と消費者の距離は近かったのですが、今では多様な食品産業や流通業者が間に入り、フードシステムが複雑化しています。このプロセスのひとつひとつを明らかにしていくとともに、日本人の食生活パターンの変遷をたどり、昔のよかった点、時代の変化に応じて改善すべき点を見極め、歪みが生じてきた日本人の食スタイルを是正すべく、新しい提言を行っていくこうと思っています」

さまざまな角度から「お茶」を考察し、さらには「食」全体へと興味のアンテナを広げていく寺本先生。まだまだ先生のアンテナは広がっていくさぞうだ。

#### >>> Profile

#### 寺本益英 助教授

てらもと・やすひで ●1967年、三重県生まれ。関西学院大学大学院経済学研究科博士後期課程終了。経済学博士。主要業績『戦前期日本茶業史研究』（有斐閣）、『景気循環でみる戦前の日本経済』（晃洋書房）、共著『社会経済史講義』（学文社）など。「大学における茶の総合学の開講・教育」で世界緑茶協会「平成14年度O-CHAバイオニア賞」受賞。「宇治茶ブランド形成過程の研究」で京都府茶業会議所より平成16年度茶学術助成金を受ける。